

A 4 7 / 1 4

# 高校生としての学力保証と生きる力を育む教科指導の在り方について

— 中学校・地域から信頼される学校づくり —

島 崎 司 (済美高等学校)

## 1 はじめに

本校は一昨年創立90周年を迎え、県下でも有数の歴史と伝統のある高校であり、これまでも学科編成等について改善がなされてきた。2009年11月5日、90周年の式典で誓った「100周年に向けてより輝く学校である」為には学校改革が喫緊の課題である。又、少子化に伴う子どもの減少や、世界同時不況による保護者の経済状況の悪化、他の私学の進学実績の向上など本校を取り巻く環境は大変厳しいものであり、2019年度入試では岐阜県の受験者人数は2万人を割り込むなど危機的状況が想定される。当面、本校教育の現状把握と教職員の意識改革を通して課題を解決する新たな取り組みが求められる。

## 2 研究の目的

2004(平成16)年4月男女共学部単位制普通科を開設、2部4学科4コースの特色ある学科編成となる。2007年3月には、念願の国公立大学(岐阜大学・都留文科大学)への合格者を出すことができ、以後毎年国公立大学や私立難関大学への合格者を出し今日に至っている。2部4学科4コースの学科・コース教育において男女共学部単位制普通科高志コース・進学コース、女子部の普通科総合選択コース・ファッションデザインコース、保育教養科、ビジネス教養科、衛生看護科がそれぞれ明確な学科・コースの教育目標を定め特色ある教育を展開し成果も上げている。また、部活動においても、ライフル射撃部、新体操部、陸上競技部は全国レベルで活躍、その他の部活動も良く頑張っている。

しかしながら、地域の人々や中学生の保護者等における本校の評判については旧態依然たるもので、学校教育における現下の努力や成果を見ていただけなく、決して良いとは言えない現状である。

学校としては、学校教育の新しい情報を発信し、学校教育の現状に対する理解を求めていくことが重要である。また、地域社会で生活する生徒の教育を一層充実し、済美高校で学ぶことに対する自信と誇りを身につけさせることが必要である。

本校に入学してくる生徒の大半は、学習面では小・中学校における学習内容が十分身につけていないこと、また、生活面では基本的な生活習慣が確立されていないことが課題である。その原因は、学習方法や学習習慣が身につけていないこと、基本的な生活習慣を確立する生育環境でなかったことなどが考えられる。このことから、教科指導においてどのような内容で、どのように指導していくことが本校の生徒に適しているのか授業研究ならびに生活指導の実践を通して、生徒が意欲的に主体的に学ぶための学習指導や基本的な生活習慣を確立する生活指導の確立が求められる。

2009年3月に告示された学習指導要領総則第5款の3指導計画の作成にあたって配慮すべき事項(3)「学校や生徒の実態等に応じ、必要がある場合には、例えば次のような工夫を行い、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るようにすること。」を取り上げ、本校に入学した生徒が、高校生としての学力を保証され、真に「生きる力」を身につけて卒業できる教科指導の在り方を中心に研究することとした。

### 3 具体的な実践

#### (1) 先進校の視察研修

- ① 訪問先 大阪市内の私立高等学校3校
- ② 訪問日 6月8日(火)～6月9日(水)
- ③ 訪問内容
  - 1) 特色ある教育活動について
  - 2) 教科指導と生徒指導の実践について
  - 3) 教員の資質向上の取り組みについて

#### (2) 教科指導の在り方研究

##### ① 研究会の実施

本校の若手教員13名からなる研究委員会(称して若手教科指導研究会)を立ち上げ、メンバーの協力を得て以下の計画の下、月2回の研究会を実施した。

4月～5月 生徒の学力及び体力実態のまとめ及び各教科年間指導計画の見直しと修正

6月～7月 次の3つの観点から研究授業及び授業研究の実施(1)

- 1) 学ぶ意欲を高める教科指導の在り方
- 2) 基本的・基礎的内容を確実に定着させる教科指導の在り方
- 3) 学習習慣を身につける教科指導の在り方

8月～9月 補充授業の実施と研究会(岐阜県教育課程研究会及び高等学校教育研究会教科部会)への参加

10月～11月 中間まとめの作成と次の3つの観点から研究授業及び授業研究の実施(2)

- 1) 学ぶ意欲を高める教科指導の在り方
- 2) 生徒が主体的に参加する教科指導の在り方
- 3) 学習習慣を身につける教科指導の在り方

12月～1月 研究の評価と次年度計画の作成及び研究報告書の作成

##### ② 授業実践(研究授業)

研究会メンバー全員が2回の研究授業と授業研究を実施し、成果と具体的な課題を明確にした。

【一期】学校の最小単位であるホームルーム活動における集団維持機能と課題達成機能の観点から分析を行った。

- 1) 集団維持機能の課題としては、授業開始に合わせて着席することができないこと、始めと終わりの挨拶・礼ができないこと、私語をすること、正しい身嗜みができないことなどがあげられた。
- 2) 課題達成機能の課題としては、授業に必要な教材の準備をすることができないこと、提出物がでないことなどがあげられた。

【二期】現在の生徒達の課題への対応の視点から、「基礎的・基本的な知識の習得」を基盤とした「思考力・判断力・表現力等の育成」、「学習意欲の向上や学習習慣の確立」及び「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」についての指導方法について分析した。

学習する目的が分からないことから学習に対して意欲が湧かないこと、指示を聞いて行動することはできるが、主体的に判断し行動することができないこと、繰り返しの習慣(家庭学習時間の確保)が乏しいため、身につくまでに時間がかかることがあげられた。

#### (3) 教科指導例

##### ① 学ぶ意欲を高める教科指導

- 1) 生徒の興味・関心を理解し実生活に繋げた授業  
生活体験の乏しい生徒の実態を踏まえ、普段のコミュニケーションで得た生徒の興味・関心か

ら生徒の実生活に繋げた身近な例をあげ、学習することの意義（学習することによって生きる力を身につけていること）を理解させる。

2) 授業展開の方法

授業の完成度（生徒の実態に即し学習効果を高める授業）を高めるため、習熟度別の学習方法、スモールステップ、ノートの書き方や板書方法、話術などを研究する。

② 生徒が主体的に参加する教科指導

1) 課題達成に向けての基礎的・基本的な内容

基礎的・基本的な内容を細分化し、生徒の能力に応じて主体的に学習できるよう工夫。

	レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	計
数学 I	26段階	45段階	45段階	19段階	24段階	159段階
数学 A		20段階	26段階	44段階	11段階	101段階

2) 授業展開の方法（パターン練習及び時間設定）

いくつかの課題を順序化し、課題が達成したら次の課題に取り組むといったパターン学習をしながら課題毎の達成時時間を計測し、スピードと正確性を意識させる。

3) 授業時間外の指導体制

放課後の時間を利用し、学習意欲のある生徒に対して補習活動場所を提供する。

③ 学習習慣を身につける教科指導

1) 授業展開の工夫

前時の確認テストや復習する時間（3分程度）を毎回設定する。

2) 個人目標の設定

個々に応じた課題を取り組ませ、達成感を味合わせる。

## 4 成果と課題

(1) 生徒の興味・関心を理解し、それをいかに学習へと繋げるかによって、学習へ意欲を持って取り組む姿が見られるようになった。そして教員においても、生徒の興味・関心だけでなく、互いの授業の仕組み方を共有したことにより、教員としての教材研究の重要性を今までとは違う視点で理解できた。しかし、今回の実践の結果、教科間の連携が積極的に行われていないことも浮き彫りとなった。教科間の連携が行われていないため、同じような内容が複数の教科で指導されるなど生徒は無駄に時間を過ごしていることも考えられる。限られた授業時間を有効にするためにも、教科間の重複する学習内容に関して整理する必要があると考える。また、本校は現在新学習指導要領によるカリキュラムの作成中であり、さらに創立100周年に向けて新しい学校教育を模索中である。新たな学校教育目標を設定するうえでも、育てたい生徒の姿を検討することが必要と考える。これらのことを明確にして、教員間の連携を強化し育てたい生徒の姿をさらに共有し徹底して指導することが今後の課題である。

(2) 基礎的・基本的な内容を細分化することによって生徒は意欲的に自分の課題を達成しようと取り組む姿を見せた。次に何をしたらよいか課題を考える必要がなく、機械的に作業を繰り返すことによって集中力の向上にも繋がった。また、パターン学習（表1）を繰り返すことによって時間短縮が生徒自身に実感でき自信に繋がったと考えられる。やればできるという自信を持たせることができれば、すべての生徒が主体的に活動し学習成果を発揮することを示していると思われる。基本的な学習内容を学び習得することで放課後の時間を利用して自己の課題達成のために自発的に学習しようとする生徒が出てきた。また、学年毎に比較してみると1年生の参加率が高いことが明らかになり、早期の指導がより効果を発揮するとも考えられる（表2）。しかし、授業時間外の指導体制が確立されていないため、指導に参加する教員が少なく、一部の教員だけでは限界があり、学校全体で取り組む必要性

を強く感じる。生徒の実態に合わせた、各教科における年間指導計画（基礎的・基本的内容を重視した）を充実することが次に取り組む課題である。

表1 パターン学習

	主な学習内容	生徒の学習活動
導入15分	○集合整列 ○準備体操および補助運動  ○本時の内容把握	○全体で集合し整列する。 ○体育委員の指示で準備体操 ランニング3周・ラジオ体操第2・柔軟体操、倒立10秒間、 腕立て・腹筋15秒間、二重跳び30秒間 ○本時の目的や内容について理解する。

表2 放課後補習参加者数

1年	参加人数	延べ人数	2年	参加人数	延べ人数	3年	参加人数	延べ人数
1組	24名	172名	1組	5名	15名	1組	1名	1名
2組	12名	19名	2組	12名	36名	2組	3名	3名
3組	18名	51名	3組	0名	0名	3組	0名	0名
4組	9名	10名	4組	0名	0名	4組	1名	1名
5組	21名	56名	5組	3名	3名	5組	4名	4名
6組	11名	30名	6組	6名	26名	6組	0名	0名
7組	1名	1名	7組	10名	31名	7組	22名	58名
8組	2名	2名						
9組	37名	136名						

- (3) ノートの取り方を変えたことによって授業のやりっ放しではなく、毎時間必ず復習することができ、授業のまとめがし易くなった。また、分からないところをそのままにすることなく、生徒が自発的に質問し自らノートにまとめるようになった。小テストを行うことで前時の復習をするようになり、定期考査での平均値も高くなった（小テスト中断後の定期考査では平均点が実施時よりも約12点も下がった）。個人個人に目標を持たせることで、取り組み方に変化が現れ、さらに、一つの目標を達成することによって自ら目標を立てるなど前向きな姿勢が見られるようになった。課題としては、小テストのやりっ放しにならないよう努力不足の生徒にはペナルティ（強制課題など）を与えるなどの工夫も必要である。さらに、生徒がより主体的に活動できるような授業展開の改善が必要と考える。

## 5 まとめ

入学生徒の実態調査からも、学習面では小・中学校における学習内容が十分身につけていないこと、また生活面では基本的な生活習慣が確立されていないこと等が明らかになった。義務教育段階までに身につけておかなければならない基礎的・基本的な内容を再指導する必要性を強く感じた。原因については様々なことが考えられるが、学校教育の中で教育成果が最も期待できるのは教科指導である。今回の研究で生徒理解の大切さも再確認できた。毎日の授業を通してどのような内容で、どのような方法で指導したら良いかなど教科・生徒指導方法を、学校全体の職員が常に試行錯誤し、研究を続けていける組織体制を確立することが重要である。大切なことは我々職員の生徒に関わり続ける思いやりであり、愛情であると実感できた。教員が生徒に対してそんな思いを持って指導することができれば、生徒は意欲的に主体的に学ぼうとする姿を見せてくれると確信している。